

広告

企画・制作 LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会

漆のアートピースを、暮らしの中に

小野寺 くるみ 宮城／漆工芸家



スーパーバイザー
小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科に通う。「進め!電波少年」や「料理の鉄人」など、数多くのヒット番組の企画・構成に携わる。執筆活動の他、京都造形芸術大学副学長、地域・企業のアドバイザー、下鴨茶寮主人などを務める。「くまモン」の生みの親でもある。

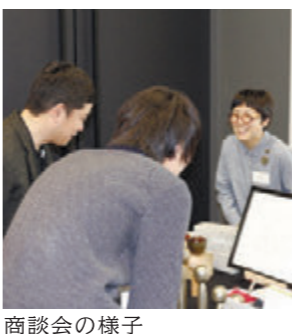


1月24日、プレゼンテーションにて

「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。LEXUSが掲げる「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。宮城県選出の匠、漆工芸家の小野寺くるみさんのモノづくりへかける思いと完成した作品を紹介する。

本プロジェクトは2016年、プロジェクトのスーパーバイザーに、放送作家として多くのヒットを手がけ、くまモンの生みの親でもある小山薫堂氏を迎え、生駒芳子氏(フアッシュョン・ジャーナリスト/アート・プロデューサー)、下川一哉氏(意匠研究所)らをサポートメンバーに発足。以来、全国の若き匠の挑戦が刻まれたプロダクトは、ふるさと納税の返礼品への指定やロックフェラー家主催のチャリティイベントへの出品、上海での国際的な展示会への出品など、目覚ましい活躍を見せている。

また当日は、2019年の新たな取り組みとして、全国の匠と、世界的クリエイター(コラボレーター)が、新たなプロダクトを制作するコラボレーションプログラムを発表。コラボレーターである隈研吾氏(建築家)、廣川玉枝氏(SOMARTA クリエイティブディレクター)、森永邦彦氏(ANREALAGE)代表取締役社長・デザイナー、辰野しずか氏(クリエイティブディレクター)プロダクトデザイナー)が登場し、想いを語った。2019年秋頃には、完成したコラボ作品、過去のプロジェクトから生まれた匠たちの作品を披露するイベントを京都の地で開催することを合わせて発表。プロジェクトも一歩一歩進化している。



商談会の様子



作品をプレゼンする小野寺さん

「匠」のモノづくりを応援

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」(主催：レクサス)は、日本各地で地域の独自性や伝統技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠」を応援する。

納得のいく作品を作りたいたから

大きな頭と細い胴体、きゅっとくびれたフォルムが宮城県の伝統工芸品「こけし」を彷彿とさせる「KURUMI」。作家と同じ名前を持つアートピースには、インテリアとして飾ることで心も生活も彩り豊かになるような、家の人を包み込むような存在になりたいという小野寺さん自身の願いが込められている。

こけしのような幼い子どもの顔や極彩色の衣装模様ではなく、漆でコーティングされた錫とシウルテイストのイラストに包まれた今回の作品。土台となる木地に漆と錫を幾重にも塗り重ね、蒔絵の技法で絵付けを施している。普段制作している日用品にも用いることはあるが、初めてアートピースを作るということもあり、今回は試行錯誤の連続だった。「もともと胴体は木地の風合いを残すつもりでいたのですが、な



川又氏の言葉が自信につながる

素材が持つぬくもりを感じて

仙台市郊外の静かな住宅街に工房を構える小野寺さん夫妻が漆と出会ったのは2009年のこと。陶芸や木工など、それぞれの分野で活躍する職人から直接技術を教わる「アート職人育成プログラム」に参加した際、「やるからにはなかなか挑戦する機会がないことにチャレンジしたい」という思いで「漆芸」を選択した。はじめは難しくそうだと身構える部分もあったが、拭き漆の技法を学んだときにそのおもしろさを実感し次第にのめり込むようになった。

「拭き漆は木地に漆を染み込ませ、余分な漆を拭き取り、乾燥させる工程を何度か繰り返すことで美しい木目



イラストは常に一点物



完成プロダクト 「KURUMI」

な満足いく仕上がりににはなりませんでした」。そんな小野寺さんに、サポートメンバーの川又俊明氏は「海外にも目を向けてみてはどうか」とアドバイス。そこで考えを改め、胴体にもイラストを施してみることにした。

外国人の多くは土台の木目よりも全体的なデザインを好む。海外への発信を前提に

が濃く浮かび上がってくる。漆と言えば黒や赤い顔料を使

った塗り物のイメージがありました。この技法で作る器は木材の温かみを感じられて気に入っています。普段の制作でも拭き漆が生み出す木の質感を大事にしているという。「KURUMI」の底面を見ると、何度も漆を塗り重ねて艶を帯びた木地、そして黒い木目がくっきりと浮かぶ。

漆芸の道に足を踏み入れてから3年という早さで工房を構えた小野寺さん。漆(樹脂)を素材としていることや、木地にこだわって制作活動を



小野寺 くるみ
宮城／漆工芸家

1981年生まれ。2009年「アートな職人育成プログラム」で漆芸に出会い、人生観が変わる。2011年仙台市にて夫婦で「うるし工房源樹」を立ち上げる。拭き漆と錫を使った絵付けの技法を組み合わせ、器やカトラリー、装身具などを制作。漆を使った独自の表現を目指しながら、漆の良さや奥深さを発信していきたいという想いを胸に、日々制作に励む。



植物や動物をイメージしながら蒔絵を施す

続けていきたいという思いから「源樹」という屋号を掲げている。夫婦が作る暮らしに欠かせない器や心ときめく

アクセサリ、日常に溶け込むアートピースは、私たちの生活に彩りと元気を与えてくれる。

